

タイトル	趣旨説明
著者	大森，一輝；OMORI，Kazuteru
引用	北海学園大学人文論集(67)：2-4
発行日	2019-08-31

趣旨説明

大 森 一 輝

それでは、シンポジウムを始めさせていただきます。

まずは、趣旨説明ということで、私のほうから今回のパネルの意図をご説明いたします。

今年の大会は北海学園学術助成から総合研究ということで研究費をいただいている4人でパネルを組みました。コメントしてくださる手塚先生に加え、田中洋也先生、ブシャー先生、村中先生もメンバーで、合計9名で共同研究を進めています。

このような形で中間報告の機会をいただいたことにつきまして、関係する先生方に心より感謝申し上げます。

私は本日の進行役を担当させていただきます、共同研究の代表で英米文化学科の大森です。よろしくお願いいたします。

観光に関わることを取り上げるわけですが、誤解のないように、まず申し上げておきたいことがあります。

我々のこのプロジェクト、あるいは商科大との単位互換とか、新設することになっている文化遺産特別演習、そうした一連の観光を取り扱う教育研究活動は、決して人文学部を観光研究にシフトさせることを目指しているものではありません。

そんなことは、不可能ですし、好ましくもないだろうと思っています。

そうではなくて、我々は、自分たちの人文学研究の応用の可能性というのを追求したいのです。

古今東西の人間の生き方や考え方を探究している我々が、それぞれの時代・地域の重要性や魅力を広く伝えるにあたっては、文化遺産という「モノ」や観光という「コト」をもっと利用できるのではないだろうか、と考

えています。

とは言いますものの、総合研究のテーマに掲げた「実践」どころか「実学」といったところにも、まだ接近できてはいません。商科大の先生とのコラボも模索したのですが、残念ながらうまくいきませんでした。

むしろ今回は、歴史研究・思想研究の立場から、文化遺産観光の抱える問題を指摘する、そういう側面が強くなります。

実学・実践の前に、根本的な困難を取り上げるわけですが、そのことは、観光を誰にとっても持続可能な経済的かつ文化的な営みにしていくためには、避けて通れない第一歩だと思います。

特に、北海道ないし北海道民にとっては、「観光振興をしない」という選択肢はないでしょうから、観光というビジネス、あるいは観光する、させるという行為そのものの怪しさとかいかかわしさといったものに、人文学的な観点から向き合うことには大きな意味があるだろうと考えているわけです。というのも、人文学部ではかなりの数の学生が観光業と旅行・交通などの関連分野への就職を志望していて、卒業後に実際にそういう現場で働いているからです。

そのような学生を教育して送り出している我が学部にとっては、彼ら彼女らが人文学的な素養を仕事に生かし、観光関連業界だけでなく地域を活性化する、そのための土台として、文化遺産を安易に商品化するのでも、ましてや無自覚・無批判に商業主義に走るのでもない、「文化を守り伝える観光」というのはどのようなものであり得るのかということを、教員側がそれぞれの学問分野から真摯に問い直して発信するということは、極めて重要だろうと思っています。

自文化と異文化を深く理解する方法を人文学部で学んだ卒業生には、さらに社会人として実践的にその学びを自ら続けながら、それぞれの持ち場で「文化の懸け橋」になってもらいたいと考えています。

だからこそ、私たちの研究・教育においても、いわゆる「実学」とは違いますが、可能な範囲で、そして人文学研究者としての持ち味を最大限に生かすような形で、社会とといいますか、この場合は観光ということになり

ますが、それとの接点を展望していきたいと考えています。

この試みが見当違いなのかどうかについては、皆様のほうから忌憚のないご意見をいただきたいと思います。以上が趣旨説明になります。